日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇一七年（平成二十九年）十二月二〇日
第二號（通巻第三十二号）

◉目録

巻頭言
〇二　漢籍啓蒙の伝統の継承
土田健次郎
〇四　国際シンポジウム
「第十二回東亜学者現代中文文学国際学術研討會――文学革命的百年伝承・暗流及特異點：現代東亜文化的光譜」開催報告
星野　幸代
〇六　第二回日仏中国宗教研究者会議
「聖地と巡礼」参加報告
酒井　規史
〇八　第21回欧州漢学会議（EACS）に参加して
内田　慶市
一〇　第六十九回日本中国学会大会開催報告
西上　勝
十二　各種委員会報告
大会委員会／論文審査委員会／出版委員会／選挙管理委員会／研究推進・国際交流委員会／広報委員会／将来計画特別委員会
十五　二〇一七年度 会員動向／新入会員一覧
十六　日本中国学会二〇一六年度（平成28年度）収支決算書
十七　日本中国学会二〇一七年度（平成29年度）予算書
十八　事務局からのお知らせ
「国内学会消息」についてのお知らせ
二〇　「日本中國學會報」論文執筆要領

編集◉神戸大学人文学研究科　釜谷武志
〒657-8501　神戸市灘区六甲台町1-1
メールアドレス：fuguwuzi@lit.kobe-u.ac.jp
発行◉日本中國學會
〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25　斯文会館内
ファックス：03-3251-4853
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org

漢籍啓蒙の伝統の継承

理事長
土田健次郎

私の学生時代、日本や世界の文学全集が各種出版されていました。専用書架も同時に販売したりしていて、インテリアとして購入するという人もいたようですが、教養への尊崇や憧憬が残っていた時代だったからでしょう。全巻読破する人はほとんどいなかったでしょうが、家に有ると無いとは大違いで、子どもが文学に目を開く契機になっていたと思います。本というものは中身を読むものですが、背表紙の書名を見ているだけで想像が広がるところもあり、少し時間ができたおりにふと書名に引かれて手に取ってみて、それが新たな文学体験になったりもするのです。通販で本を購入するのは便利ですが、予想外の本との出会いがあるのは書店や図書館、それにミニ図書館とでもいうべき全集物です。それが全集物はとんと出版されなくなり、以前刊行されたものも書店で見かけなくなりました。

漢籍関係のシリーズ物もけっこうありました。『新釈漢文大系』、『中国古典小説選』(以上、明治書院)、『全釈漢文大系』、『漢詩大系』(以上、集英社)、『中国古典選』、『中国文明選』(以上、朝日新聞社)、『中国の古典』(学習研究社)、『鑑賞・中国の古典』(角川書店)、『中国の古典』(講談社)、『中国古典新書』(明徳出版社)、『中国の思想』(徳間書店)、『中国詩人選集』(岩波書店)。現代語訳だけなら『中国古典文学全集』(平凡社)があり、高校の図書室であちこちの巻を覗いてみたものです。以上は、中国前近代中心に順不同で思いつくままに並べてみたので遺漏もありましょう。また当学会関係では、中国近代関係や日本漢詩のものも刊行されてきたことは言うまでもありません。

このような一般読者を意識したシリーズ物が中国学の裾野を広げていたのは確かだと思います。それがあまり出版されなくなったのは、根本的には出版不況のせいですが、中国物の場合には漢文物に対する知識や関心が低下していることがやはり大きく働いていると思います。需要が減ったから供給も減ったわけで、新たな需要を開拓するために赤字覚悟で供給を増やすということができればよいのですが、いかにも困難な話です。

学生時代に老先生に「先生は学生時代、中国の古典をどのような本で学んだのですか」とお聞きしたところ、『漢籍国字解全書』の名をあげておられました。老先生たちの時代は、本格的に漢籍読解の修練を受ける前は、このシリーズや『国訳漢文大成』のようなものを通して古典を読まれたのだと思います。

私が啓蒙的訳注書を侮れないと感じるようになったのは最近のことです。数年前に朱熹の『論語集注』の全訳注を刊行しました。その時によい参考書はないかと日、中、朝の本をさがしたのですが、なかなか役に立つものにめぐりあえませんでした。『論語集注』があまりに有名かつ基礎的な書物なので、いまさら初歩的な出典をも網羅した注釈書など書くのは恥ずかしいと思われていたのかもしれません。その中で出色なのは中村惕斎の『論語示蒙句解』で、『漢籍国字解全書』に収められています。『論語集注』の逐語訳ではなく、出典もあまりあげていませんが、実に的確に内容の把握がなされていて、明治時代以後の類書より遙かにすぐれ、今更ながら江戸時代の朱子学者の実力を感じました。

ところが『論語集注』訳註が全巻刊行された後で、辻本雅史氏の『思想と教育のメディア史—近世日本の知の伝達』を読んでいたところ、毛利貞斎の『四書集注俚諺抄』

(1715年刊行)が役立つことを知りました。中村惕斎などよりも「一段高い」とあったので、早速古本屋で手に入れて見たところ、朱子学そのものの理解が惕斎以上にあるとは思えませんが、惕斎のものよりずっと詳細で、かなり便利な本なのです。近代以前の朱子学者による『論語集注』の注釈類は山のようにあるのですが、関連する朱熹や後世の朱子学者の語を羅列する類のものがほとんどで、実際に訳註を作る段になると案外役に立たないものです。それに比してこの本は出典の指摘が他書よりもずっと詳しく、朱熹の注釈本文の解説も丁寧になされています。引用文は漢文ですが地の文は和文で、典型的な江戸時代の啓蒙書です。惕斎の著書については、彼の朱子学者としての圧倒的な力量を認識していたのと、『漢籍国字解全書』が手近にあったため参考にしていたのですが、貞斎の方は見逃していて、自分の浅学を恥じているところです。江戸時代の碩儒からは、専門家のくせにこのような俗書を相手にするとはと笑われそうですが。

江戸時代の経書関係の啓蒙書と言えば、渓百年の『経典余師』という翻訳シリーズがあります。経書類が中心のシリーズで、私は鈴木俊幸氏の『江戸の読書—自学する読者と書籍流通』で知り、早速『四書』のセットを古本屋から購入しました。『四書』の部の初刻は1786年です。本書は原文、書き下し、翻訳が和文で書かれていて、漢字部分には全てルビがふられています。つまり仮名さえ読めれば、本文も読め、意味も理解できるのです。原文の訳文は平易な和文で、自習書としてよくできています。師匠を得られなかった人々が本書を購入し、熟読し、経書を修得していったのも当然です。二宮尊徳は教育を受ける機会が無かったので、独学しましたが、二十六歳の時に本書を購入しています。このシリーズも先の貞斎のものもたいへん売れたそうで、このような書物の需要がいかに多かったがわかります。

そう言えば驚異的な学殖を誇った荻生徂徠も、譴責を受けて上総に逼塞していた父とともに過ごした少年時代、書物に飢えていた中で『大学諺解』を繰り返し読んだと自分で言っています。この本は林羅山のものとかそうではないとか言われていますが、書名が示すように啓蒙書です。また後に宇都宮遯庵の標注を耽読したと言います。よき師を得られず書物に囲まれる環境の無かった者にとって自習できる本はまことに貴重だったのです。宇都宮遯庵というと、毛利貞斎のように多作と啓蒙ということで軽んじられがちですが、その存在は無視できません。

先に言及した『漢籍国字解全書』は明治42年に早稲田大学出版部から出版され始め、たいへんよく売れました。第四輯まで出版されていますが、そのうち第二輯の前半までが江戸時代の儒者のもので、それ以後は早稲田の高等師範部に集った学人のものです。つまり啓蒙方面の江戸時代の伝統を直接引き継ぎ、次に橋渡しをしたと言えるのです。

江戸時代の『経典余師』は、文章も平易明快で、その啓蒙への意志は近年のものよりも徹底しています。ただ時代が変わった現代では、一般の人たちが全く辞書無しで読めるわけではありません。今の時代には今の言葉で書かれたものが求められます。啓蒙書こそは絶えず新たに作られていく必要があるのです。最近『杜甫全詩訳注』や『老子』などの新訳注も文庫に入り、同様の企画も他に進んでいると聞きます。心強い限りですが、ただシリーズ物が途絶えがちなのはやはり寂しく感じます。綿々と続く漢籍啓蒙の伝統を継承することも、中国研究者の使命の一つではないでしょうか。

国際シンポジウム「第十二回東亜学者現代中文文学国際学術研討會」開催報告

——文学革命的百年伝承・暗流及特異點：現代東亜文化的光譜

名古屋大学
星野　幸代

2017年10月28、29日、名古屋大学にて第十二回東亜学者現代中文文学国際学術研討會を開催した。当該国際会議は、1999年東京大学で開催された国際シンポジウム「東アジアにおける魯迅の受容」を契機とし、東アジア諸地域中国語(圏)の文学研究者が結集した連合組織「東アジア学者中国現代文学国際学術研討会」を母体とする。ほぼ隔年でソウル、東京、シンガポール、香港、台湾の大学で開催されてきた。今回は①文学革命百周年、②郁達夫が留学した名古屋での開催、以上の2点を意識しつつ、国内外の研究者を招聘した。

名古屋大学は旧制第八高等学校(通称：八高)を前身とする。郁達夫(1896-1945)は1915-19年八高一部(医)を経て第一部(法・文)に在籍し、19年卒業、東京帝大に進んだ。在学中は校友会雑誌や「新愛知」新聞(中日新聞)に漢詩を投稿した。代表作「沈淪」は八高時代に取材している。旧制八高の地は戦災を経て名古屋市立大学となったが、今回のシンポジウム開催地・名古屋大学東山キャンパスには、大学のシンボル豊田講堂の前に郁達夫記念碑が建っている。これは1998年、八高九十年祭を機に建立され、往年の八高生たちが寮歌「伊吹おろし」を合唱するなか、除幕式が行われたものである。本シンポジウムにおいても小雨のなか郁達夫記念碑散歩を決行した。(写真)

開幕セッション「関注文学革命一百年：以陳独秀為主題」では、『新青年』を軸として三氏の長年の知見を凝縮した基調討論が展開された。江田憲治氏(京都大学)「中共的“五四”記念和「文学革命」論争的変遷」は1920－50年代にわたり文学革命の文学史的評価が確定される過程を、周揚、李何林らの論争を中心に検討した。王中忱氏(清華大学)は残念ながら欠席となり、小川利康氏(早稲田大学)が予稿「作為『新青年』同人的陳望道的语言文章観」を代読した。本稿は、陳望道のマルクス『共産党宣言』全訳の前段階として、標点の効能及び白話文の構造に関する彼の見解を、胡適との比較を通じて考察した論考である。長堀祐造氏(慶應義塾大学。司会者兼)「陳独秀的「回復黨籍問題」與〈答託洛斯基派的信〉」は、馮雪峰が魯迅名義で発表した「トロツキー派に答える手紙」及びそれに基づく陳独秀＝トロツキー派＝漢奸説の宣伝が、中共の検討していた陳独秀の「党籍回復」を妨げた経緯に関する熟考であった。

第一場「思想與論述策略」は小川利康氏(早稲田大学)が司会をつとめた。張釗貽氏(オーストラリア、クイーンズランド大学教授)「魯迅與德意志文化的契合初探」は文化史家J.シェーラー、言語学者W.フンボルトの直接・間接的な影響を例とし、魯迅とドイツ思想文化との親和性を解析した。白永吉氏(韓国、高麗大学)「現代中国文学中的基督教話語」は周兄弟から現代台湾文学に至るテクストを引きつつ、五四時期に受容されたキリスト教思想と個人主義、民族主義、マルクス主義との軋轢を考察した。津守陽氏(神戸外国語大学)「穿梭於自我想象與他者表象之間——探索漢語圈現當代文学鄉土敘事的動力」は、自明とされてきた用語「郷土」を外来の概念として捉え直した上で、沈従文の描く「郷下」を「他者」表象として再解釈した。

第二場「台湾文学」は山口守氏(日本大学)が司会をつとめた。范銘如氏(台湾、政治大学)「台湾小説的基本面」は、氏の「空間」概念で小説を分析する一連の論考を受け、「点」「線」に続く「面」概念を切り口とし、台湾現代文学分析に記号論と都市地理学の理論を運用した。陳国偉氏(台湾中興大学)「華語語系、翻譯日本與台湾大衆文学的再製——以

妖怪推理「言語道断之死」系列為例」は現代台湾推理小説に登場する中・日・台の要素が混在した「妖怪」と、虚構のコロニアル設定を分析し、これらの大衆文学が、ポストコロニアル台湾の新たな主体性の模索に貢献していることを提示した。

2日目午前の第三場「文学之跨域性」は、白永吉氏が司会をつとめた。張文薫氏(台湾、台湾大学)「歴史性與亜細亜主義——以郭松棻文学為中心的探討」は、米国移住した台湾作家・郭松棻の作品について、植民の記憶を描く初期段階から、ボーダーレスな共同体への帰属志向に至るまでの軌跡を追い、その傾向と竹内好のアジア主義との類似点を示唆した。神谷まり子氏「民国初年社會小説中的汽車書寫與女性形象——朱瘦菊「新歇浦潮」」は、鴛鴦胡蝶派小説を対象に、近代が女性にもたらした自由、移動可能性、それに伴う性的放胆さが、自動車に乗るという行為に表象されていることを論証した。

第四場「文学於東亜」は筆者が司会を担当した。張東天氏(韓国、高麗大学)「日據時期韓国的世界文学觀念和中国新文学的位置」は、初期の中国新文学が韓国の文学運動を刺激し、「世界文学」と同列に論じられる兆しを見せつつも、日本語を介した外国文学需要が主流となるにつれ周縁化した様相を論証した。陳朝輝氏(名古屋大学)「探尋青年竹内好的足跡」は、戦時期日本が中国の民族的内部解体を企図して設けた回教圏研究所で竹内好が働き、国策にコミットしていたことに初めて光を当てた。

最終セッション「郁達夫及創造社同人」は藤井省三氏(東京大学)が司会をつとめた。大東和重氏(関西学院大学)「郁達夫與日本早期普羅文学——以辛克萊「拝金藝術」之翻譯為中心」は、郁達夫と日本の初期プロレタリア文人との交流およびプロ文学への共鳴を論証した。莊華興氏(マレーシア、プトラ大学)「從失踪到隱匿：以郁達夫和金枝芒為例探討馬華文学的存在之議」は、郁達夫と金枝芒の創作姿勢を比較しつつ、マレーシア華僑はディアスポラを経ても中国民族主義を失うことなく馬華文学が開花させたが、政治的背景により不可視化されたことを跡づけた。中村みどり氏(神奈川大学)「羅漫主義精神的變遷——陶晶孫的跨国身份與文学空間」は、日中の“異邦人”陶晶孫がロマン主義を精神的支柱としつつ、日本のプロ演劇に共鳴したのち、淪陥区での文芸活動に瀕して如何に葛藤したかを潜考した。工藤貴正氏(愛知県立大学)「從“文学革命”轉換為“革命文学”的時代：以馮乃超接受大正生命主義與馬克思主義文藝理論為例」は日本華僑・馮乃超の初期創作、翻訳から革命文学論争に至るまでの思想的変遷の背景を考察した。

藤井省三氏は総評として、今回は理論的、伝記的研究が充実していた反面、作品論が少なかった点を指摘し、文学研究の最終目的はやはり作品解釈にあり、次回は作品論のより豊かな展開に期待したいと締めくくった

多彩な報告をかなり強引だが総括してみたい。東アジア文学は、20世紀初の「世界文学」概念においてはいずれも周縁的な位置にあり、対西洋文学という問題に共時的に遭遇した。その後中国・台湾・朝鮮は、しだいに強制的／戦略的に日本を介して西洋文芸を受容するようになる。日中戦争とそれに続くポストコロニアル状況及び内戦の中で、広義の中国文学はエミグラント／ディアスポラにより飛び地を作り、往々にして不可視化され、記憶喪失の層を重ねてきた。しかし昨今の研究によりその層は掘り下げられ、伏流が発見され、植民地の抑圧／被抑圧の図式を脱構築する創作も現れてきている。

なお、次回は2019年度韓国にて(開催校は交渉中)開催予定である。

郁達夫記念碑を囲んで

第二回日仏中国宗教研究者会議「聖地と巡礼」参加報告

慶應義塾大学
酒井　規史

2日目の会場のソルボンヌ

2017年3月24・25日の二日間、第二回日仏中国宗教研究者会議「聖地と巡礼（Holy sites and pilgrimages）」がフランス・パリで開催された。道教に関わる宗教聖地とそこで行われる巡礼をテーマにした会議であり、土屋昌明氏（専修大学）が近年進めているプロジェクト「中国道教における聖地と巡礼に関する総合的調査と研究」（科研費基盤研究B：16H03349）の研究活動の一環である。フランス側ではEPHE（フランス高等研究実践学院）のVincent Goossaert氏（以下、ゴーサール氏）が幹事を務めた。

今回の会議は、同じく土屋氏とゴーサール氏の主催によって2013年3月に行われた、第一回日仏中国宗教研究者会議「中国宗教における聖地――宇宙論・地理学・身体論」（於専修大学）を継承したものである。土屋氏がフランスに在外研究した際に生まれた交流を基礎として、前回はフランスの研究者6名が日本に招聘された[注1]。今回は逆に、日本側の研究者総勢16名がフランス・パリに赴いた。なお、日仏と銘打ってはいるが、日本側には台湾の研究者、フランス側には中国大陸とアメリカの研究者も含まれていた。

ちなみに、道教に関わる日本とフランスの共同会議は80年代にも行なわれたことがある。当時、日仏会館とCNRS（フランス国立科学研究センター）との協定による日仏学術シンポジウム（通称：日仏コロック―コロックcolloqueは会議の意味―）の東洋学部門で、東アジアの宗教研究に関する部会が組織された。1985年の第四回会議（於パリ）では「道教と日本文化」、1988年の第五回会議（於伊東市）では「日本・中国の宗教文化の交流」というテーマで、日仏の研究者が共同で会議を開催したのである。[注2]

その第五回会議の企画・運営で中心となったのは、福井文雅氏（早稲田大学・当時）とKristofer Schipper氏（EPHE。以下、シペール氏）であった。福井氏のフランス留学中に同期であったシペール氏との交友関係が、会議の実現と運営に大きく寄与した。周知のように、両氏とも日仏の中国宗教、とくに道教における代表的な研究者であり、後進の育成にも尽力された。今回の会議にも両氏に教えを受けた、もしくは縁のある研究者が多く参加しており、当該分野の日仏交流における影響の大きさを感じさせられた。なお、今回の会議では、残念ながら福井氏の参加はかなわなかったが、シペール氏は発表を行なった。

それでは本題にもどり、今回の会議の様子を紹介したい。上述の通り、会議の主題は「聖地と巡礼」である。もともと土屋氏の研究プロジェクトは、道教の“洞天福地”の研究からスタートした。洞天福地とは中国各地に存在する聖地で、洞窟の中に仙人の世界が広がり、それぞれが地下でつながっているとされている。桃源郷で有名な『桃花源記』の物語は洞天福地の思想にもとづいているといえばイメージしやすいであろうか。各地の洞天福地には道観などの宗教施設が建てられることも多く、現在でも各地域の宗教信仰の中心地となっている場合が多い。また、洞天福地もふくむ宗教聖地への巡礼は近世以降盛んになるが、これまで研究の手薄だったテーマである。

今回の会議のテーマには、「道教の生きた伝統と、東アジアの仏教・帝国および地方の実践との比較的観点(The Daoist living tradition and comparative perspectives on East Asian Buddhist, imperial and local practices)」という副題もつけられていた。道教の聖地信仰と巡礼の研究にとどまらず、仏教・朝廷の儀礼・民間信仰・修験道などの東アジア地域で信仰される各種宗教といった周辺領域もカバーし、より総合的に中国宗教における聖地信仰と巡礼について考察するというコンセプトを示していよう。以下、各パネルの主題と報告者を紹介したい（敬称略。）なお、すべての発言は、中国語ないし英語でおこなうのが原則とされた（ただし、土屋氏による開会の辞はフランス語、三浦氏による閉会の辞は根岸氏がフランス語に通訳）。

● 3月24日（会場：フランス会館）

- 日仏幹事による開会の辞
- 基調講演：三浦國雄（四川大学）・袁冰凌（福州大学）
- 第一パネル「中国の聖なる山々とその訪問者（Chinese holy mountains and their visitors）」：Vincent Goossaert（EPHE）・土屋昌明（専修大学）・Pierre Marsone（EPHE）・Anne Bouchy（EFEO – Lisst-CAS）
- 第二パネル「寺院と巡礼のネットワーク（Temples and pilgrimage networks）」：Kristofer Schipper（EPHE）・石野一晴（慶應大学）・Marcus Bingenheimer（Temple University）・方玲（CNRS – GSRL）・筆者（慶應大学）・山下一夫（慶應大学）

● 3月25日（会場：パリ大学（ソルボンヌ））

- 第三パネル「聖地と洞天の概念（Conceptions of the holy sites and dongtian）」：廣瀬直記（早稲田大学）・Isabelle Ang（Collège de France）・志賀市子（茨木キリスト教大学）・魏斌（武漢大学）・潘君亮（Université Paris-Diderot）
- 第四パネル「比較的アプローチ・東アジアにおける聖地（Comparative approaches–Holy sites in East Asia）」：森瑞枝（立教大学）・Isabelle Charleux（CNRS – GSRL）・汲喆（Inalco）・頼思妤（東京大学大学院）
- 映画上映『妙峰山への巡礼（The Pilgrimage to Miao-fengshan）』：Patrice Fava（EFEO）・コメント：二ノ宮聡（関西大学）
- 閉会の辞：田中文雄（真言宗豊山派総合研究院）・三浦國雄・Kristofer Schipper

＊このほか、司会・コメンテーターとして大形徹（大阪府立大学）・根岸徹郎（専修大学）・二階堂善弘（関西大学）・池平紀子（京都産業大学）・佐々木聡（大阪府立大学）が参加。

会議初日の様子

冒頭で基調講演を行なった三浦氏は、洞天福地研究の世界的な先駆者であり、本会議のオープニングを飾るにふさわしい報告者であった。それに続いて、上述のテーマとコンセプトに沿ってパネルが組織されており、総勢20名を超える研究者が、さまざまな時代・地域・分野にわたる報告を行なった。第一パネルではゴーサール氏が道教の代表的な聖地である龍虎山について、土屋氏が唐代道教の巡礼についての発表を行ない、全体のコンセプトをあらためて示す形となった。第二パネルでは、聖地に付随する宗教施設と巡礼に関する報告がまとめられ、特に近世以降の展開が示された。第三パネルでは六朝時代から現代に至るまでの、個々の聖地や地域における宗教活動に関する報告がなされた。第四パネルでは、日本における中国宗教文化の受容や仏教に関する報告がまとめられていた。最後に、現在の妙峰山における巡礼と祭礼の復活の様子をとらえたドキュメンタリー映画が上映され、今回の会議のテーマがアクチュアルなものであることを確認することができた。

また、両日ともに会議後は懇親会が開催され、双方の参加者がスムーズに交流を深められるよう配慮されていた。日本側の報告者に若手研究者が多く含まれていたのは、今後の日仏学術交流の継続性を意図してのものである。今後は、先人たちの築き上げた基礎の上で、次の世代が学術交流を続けていくことが期待されよう。

会議の報告内容は多岐にわたり、中国宗教に関するさまざまな問題が提起され、筆者も大いに啓発を受けた。発表されたペーパーは、フランス語あるいは英語でまとめられEPHEから論文集として出版されることになっており、中国宗教に関心のある研究者には必読の書となるはずである。ぜひ手に取ってご覧いただきたい。

追記：会議から約一ヶ月たった5月初め、日仏の中国研究における学術交流に尽力された福井文雅氏が亡くなった。教えを受けた者の一人として、その志を継承したいと思う。

（注1）この会議の成果は、土屋昌明／ヴァンサン・ゴーサール編『道教の聖地と地方神』（東方書店、2016年）にまとめられている。

（注2）第五回会議の成果は、酒井忠夫・福井文雅・山田利明編『日本・中国の宗教文化の研究』（平河出版社、1991年）にまとめられている。

第21回欧州漢学会議（EACS）に参加して

関西大学
内田　慶市

第21回欧州漢学会議（EACS＝European Association for Chinese Studies）は2016年8月23日から28日の期間、ロシアのサンクト・ペテルブルグで開かれた。2年に一度開かれるこの会議には、今回、ヨーロッパ、アメリカ、中国、台湾などから約500名の研究者が参加した。ただ、日本からは私を含めて4，5名で若干寂しい感じもした。

開幕式のあと、「The St.Petersburg school of Chinese studies」と題したモスクワのロシア科学アカデミーのVladimir S. Myasnikov氏の基調講演が行われ、その後、サンクト・ペテルブルグ大学、ロシア科学アカデミー東方文献研究所の2つの会場で、それぞれ全部で21のセッション、98パネルに分かれて研究発表が行われた。

21のセッションとは以下の通り。

Linguistics
Teaching Chinese as a foreign language
Premodern literature
Modern literature
Cinema, theater, performing arts
Translation studies
Art, archelogy & material culture
Chinese manuscripts, books, artifacts abroad
Religion
Philosophy
Premodern history
Modern history
East-west contacts & perception
Politics & international relations
Sociology & anthropology
Gender studies
Economics
Law
Media studies
Environment
Cross-sectional

これを見れば分かるように、言語学、言語教育、近代文学、現代文学、哲学、翻訳、宗教、歴史、政治、経済、法律等々実に様々なジャンルが含まれている。まさに「Chinese Studies＝中国学」である。このうち最後のセッションはいわゆる「学際的」なもので、私などもこちらのセッションに入った。

今回、私たちは次のようなテーマでパネルを組んだ。

The Manchu Knowledge and the Manuscripts: Managing the Social and Sacred life in the Qing Dynasty

いわゆる、「満洲語」に関わる文献の報告であり、パネラーと発表タイトルは次の通りである。

南洋理工大学・關詩佩：The Manchu Craze in the Sini-British interpreters: Thomas Taylor Meadows and Qingwen Xulue清文叙略

中国社会科学院歴史研究所・邱源媛：A study of “Officially Compiled Genealogy” in China from the

会議参加者一同

Eighteenth Century to the Early Twentieth Century - Focus on the “The Archive of Genealogy in the Qing”.

中国中央民族大学歴史文化学院•顧松潔：The Oirat Mongol Surrenders in Hunchun during the High-Qing Period.

関西大学•内田慶市：Louis Poirot’s Manchu-Chinese Translated bible.

実は私の扱った資料は、今回の会場の一つであるロシア科学アカデミー東方文献研究所に所蔵されているフランスのイエズス会宣教師ポアロの手になる漢漢合壁版『古新聖経』であり、これまでほとんど取り上げられることのなかったものだが、サンクト•ペテルブルグにはこうした満洲語関係資料も極めて多く残されている。また同研究所には満洲語のプロパーの研究者もおり、敦煌研究や西夏語研究などと共にもっと注目されてよいと思われる。

本会議はこれだけのパネルがあると到底全ての発表を聞くことはできないが、今回私の興味を引いたものを幾つか挙げておく。

Section8: Chinese Manuscripts, Books, Artifacts Abroad.

Popova Plga (Institute of Scientific for Spcial Sciences RAS).

Alekseev Collection of Chinese caligraphy and Books in Moscow.

Maiatckii Dmitri (St. Petersburg State University).

About Chinese Rare Books Collections in the Library of the Fuculty of Asian and African Studies at St. Petersburg State University.

Monnet Mathalie (Bibliotheque National de France).

Jade as a Writing Material for Emperor Qianlong.

このセッションでは他に「西夏文字」関連の発表も幾つか見られた。

また、次の発表も私には極めて参考になった。

Section13: East-West Contacts & Perceptions

Popova Irina (Institute of Oriental Manuscripts, RAS).

Vocabularies of Kyakhta-Maimaicheng Pidgin.

Di Toro Anna (Universita per Stranieri in Siena).

A Lexical Analysis of I. Bicurin’s Version of Sanzi jing (Troslovie, 1829) against the Background of Russian Sinology of the Eraly 19th Century.

なお、この会議での使用言語は英語であるが、質疑応答の際には中国語も可能であった。これは欧米の中国学あるいは東アジア関係の会議ではよくあることではある。

また、次回は2018年にイギリスのグラスゴーでの開催が決まっている。

今や中国学に限ったことではないが、国際的な会議が毎年沢山開催されている。たとえば、筆者が参加した中国語学、中国語教育、文化交渉学に関するものでも、以下のような会議がこの1年に開かれている。

第1回欧州漢語教学学会
2017年2月10－12日（ハンガリー•ローラン大学）
第9回東アジア文化交渉学会
2017年5月13－14日（中国•北京外国語大学）
第10回宣教師言語学学会
2018年3月20－21日（予定：イタリア•ローマ大学）

いずれにせよ、日本も国内だけに止まらず世界に向けて自分たちの知見を発信する時代であることは疑いのない事実であり、今後、特に若い研究者はもっともっと積極的に関与すべきであると思っている。

開会式

東方文献研究所における分科会

第六十九回日本中国学会大会開催報告

山形大学
西上　勝

第六十九回目の本学会大会は、本年10月6日（金）午後の学会理事会を皮切りに、翌7日（土）と8日（日）、山形大学小白川キャンパスを会場に開催されました。大会準備会の代表をつとめた者として、その模様、運営についてご報告させて頂きます。

山形大学に在籍する会員が準備会の中心となって、本学会大会を山形で開催するのは、今回が最初のことでした。大会開催担当の依頼を頂いた時は、任を果たすことができるものか大変不安でした。奈良女子大学で開催された第六十八回大会の閉会式の次期当番校代表挨拶でも、地方国立大の置かれた厳しい情況ゆえの躊躇を口にせずにはすみませんでした。

しかし、結果的には研究発表及び次世代シンポジウムに、のべ450名を超える方々が来場され、7日夕刻に市内ホテルを会場に開催した懇親会にも120余名の方々のご参加を頂きました。これも土田健次郎理事長をはじめ理事の先生方と学会事務局のご指導・ご支援、さらに研究発表、シンポジウムに取り組んで頂いた発表者と司会者の先生方の積極的なご協力あってのことでした。先ず、皆さまに厚く御礼申し上げます。

私ども準備会は、山形大学の人文社会科学部と地域教育文化学部に在籍する会員3名が、渉外を担当とする代表と、経理担当及び大会運営担当、と業務を分担しつつ、できる限りシンプルな運営を目指す方針で準備活動を開始しました。しかし、もちろん3名だけで運営を担いきれるものではありません。大会の開催担当の決断は、他大学に在籍する師友の励ましと援助を得て、はじめて下せたものでしたし、大会当日の運営に当たっても、他大学在籍の先生、指導学生たちやその友人、さらには東北大学文学研究科の院生諸氏、こうした方々の応援を得てはじめて可能でした。

地方国立大の文系学部は、近年の大学のミッション再定義から開始された人文社会系学部と教員養成系学部の継続的な再編の流れの中で、度重なる変革を余儀なくされています。山形大学でも、従来のあり方から大学執行部のトップダウン指導体制に移行し、教授会は独立した機能を喪失しつつあり、教員人事でも年度予算でも大学執行部の意向が重視されるようになりました。こうした動きの中では、本学会を支えるような教育態勢は、山形大学ではほぼ失われつつあります。今回の大会開催担当で、最も心苦しく思われたのは、私どもが置かれたこのような状況でした。今後、このような地方国立大の状況が、かつての状態に復する可能性はかなり乏しいように想像されます、こうした点にもご配慮いただければと存じます。

当番校の業務の中心は、発表者と司会者への連絡調整と来場された会員への対応でした。こうした業務のやりく

山形大学学生サークルによる花笠踊演舞

りについては、前回六十八回大会で準備会代表を務められた野村鮎子先生から懇ろな申し送りを頂き、業務の進め方を予想する上で大変な助けとなりました。初日の受付業務が混乱することはないか、と当初懸念しておりましたが、会員の皆様のご配慮や受付を担当してくれた学部生たちが予想外にしっかりとした受け答えをしてくれたおかげで大過なく進行致しました。ただ、諸会費の当日受領は、混乱の原因ともなりかねませんので、これからは大会要項にも毎度記載のある通り、振替受領証を提示していただくことにより諸会費支払い済みを確認する方法が本学会のマナーとなることを望みます。また発表者の方々には、部門を問わず一律に150部の発表用資料のご準備をお願い致しましたが、一部の方では苦心して準備して下さった資料が、残部大量となる結果となってしまい、準備会としては大変申し訳ない気持ちがしました。発表用資料は欠かせないものではありますが、軽量化が検討されても良いのではと強く感じられました。

前回大会では研究発表以外に、講演会やシンポジウムなど多くの新しい企画が盛り込まれておりました。私どもは、土田理事長から事前に示唆頂いた、次世代シンポジウムの申し込み受付を実施するだけで手一杯で、目新しい企画を進める余裕がありませんでした。ただ、山形大学小白川図書館・附属博物館と連携し、学会に合わせて特別展「山形と沖縄をつないだ琉球漢詩文」を開催できたことは大変な喜びです。多くの学会会員諸氏にも、新たな関心を抱いて頂けたのではないかと存じます。この展示を思いついたきっかけは、前回大会の懇親会の帰途、鹿児島大学の高津孝先生から「山形には琉球文書があるんですよ」とお伺いしたことでした。その後さらに、沖縄県うるま市で進められていた琉球漢詩文調査に関する調査報告書を、高津先生からご提供頂きました。また、附属博物館長をつとめている本学部の新宮学教授に、高津先生が本学図書館の調査にお越しになっていたことを教えて頂き、新宮教授がこれまで関心を持って進めてきた米沢の郷土史家・伊佐早謙の林泉文庫の調査、それと組み合わせた特別展の開催に向けて、検討を進めることにしました。その過程でも、高津先生からは助言を頂戴しましたし、さらに学会開催期間中、二度にわたってギャラリー・トークを進んで担当して下さいました。おかげで多くの会員諸氏が参観され、好評を頂きました。ここで、高津先生に改めて厚く御礼申し上げます。

さて、懇親会開催も準備会の主要な任務の一つです。今回は、石川忠久先生から自作の漢詩をご披露頂いた後、山形大学学生サークルによる山形花笠踊りを、皆様にご鑑賞頂きました。サークル名「四面楚歌」については怪訝の声が上がったものの、大学で一二を争う大所帯のサークルから選抜された学生たちの力のこもった踊りには、暖かい賞賛の拍手を贈って下さり、企画した私どもも大会開催までの準備が報われたような思いがいたしました。ありがとうございました。

高津孝先生のギャラリー・トーク

特別展チラシ

❖ 各種委員会報告

大会委員会

委員長　赤井　益久

1）第69回大会について

平成29年度第69回大会は、平成29年10月７日（土）および8日（日）の両日にわたって、山形大学小白川キャンパス（山形県山形市小白川町一丁目4-12　西上勝代表）において開催されました。二日間で延べ470名の参加者を得ました。思想哲学部会、文学語学部会、日本漢文部会の三会場に分かれて、33件の研究発表とパネルディスカッション「表象文化研究の試み」が行われ、活発な質疑があり、実り多い成果が上がった大会となりました。場所を山形国際ホテル6階「スプレンダー」に変えて開かれた懇親会も130名ほどの会員が出席され、山形大学の学生有志によるはつらつとした「花笠音頭」のご披露もあり、親睦を深めることができ、大いに盛り上がりました。

2）第70回大会について

明年度、日本中国学会第70回の記念大会は、平成30年10月6日（土）および7日（日）の両日にわたって東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区駒場3-8-1　大木康代表）において開催されます。観光シーズンとも重なりますので、早めに宿泊施設の予約を取るようにお願い致します。

3）「次世代シンポジウム」の在り方について

今回はひろくパネルディスカッションを募集する形で開催しました。理事会では今後とも今回の評価を踏まえ、会員諸氏のご意見と大会開催校のご意向をうかがい、検討を重ねて参ります。明年度は、第70回大会と言う記念すべき大会であり、それにふさわしい大会にすべく開催校と相談をして参ります。

論文審査委員会

委員長　大木　　康

○10月7日の論文審査委員会

10月7日に論文審査委員会が開催され、学会報第70集の論文審査にむけて、スケジュール、作業工程等が確認された。

- 学会報第69集には、依頼論文4篇、投稿論文16篇の合計20篇の論文を掲載することができた。2018年1月15日に投稿論文が締め切られる第70集についても、多くの優れた論文が寄せられることを願っている。
- 学会報の「論文執筆要領」が改訂された。改訂の骨子は、論文の枚数規定を、これまでの400字詰原稿用紙基準から、ワープロ基準に改めたことである。投稿論文の公平性を確保するため、枚数超過に対しては厳正な姿勢で臨んできたが、原稿用紙の枚数を基準としつつ、ワープロによる投稿を認めていた現状では、枚数調査が困難をきわめていた。投稿論文のすべてがワープロ原稿になったといってよい現実に鑑み、今回の改訂に至った。今後、枚数については、以下のようになる。

原稿枚数は、本文・注・図版等を合わせて、以下のように定める。ワープロ使用の場合、用紙サイズはA4、1行30字、毎ページ40行、文字は本文、注ともに10.5ポイントを用い、18ページ以内（厳守）とする。

ここで、特にご注意いただきたいのは、「文字は本文、注ともに10.5ポイントを用い」というところ、すなわち注も1行30字、毎ページ40行となる点である。Wordや一太郎等ワープロソフトの脚注機能をそのまま用いて印刷すると、規定違反になることがある点、注意を喚起しておきたい。

なお、ワープロ基準にしたとはいっても、手書き原

稿による投稿を禁止したわけではないことを付言しておく。

論文要旨についても、「原稿用紙5枚以内」から「2000字以内」に改めた。

論文投稿にあたっては、最新の「論文執筆要領」を熟読の上、論文を作成していただきたい。執筆要領にも示しているように、規定に違反する論文は、受理しない。

・本委員会の野間文史委員が退任され、末永高康会員が後任として委員になった。

出版委員会

委員長　釜谷　武志

第1回出版委員会を7月30日に開催して、学会報に掲載する学界展望の講評原稿を、哲学・文学・語学の3部門にわたって検討しました。

第2回の委員会は、10月7日、山形大学での学術大会の1日目に開きました。主な内容は以下のとおりです。

○学界展望について

文献目録の廃止

現在、学界展望は、哲学・文学・語学の３部門に分けて講評文を学会報に掲載しています。加えて、学会のホームページに国内の刊行物を対象に、著書・論文リストを掲載しています。このうち、講評文は引き続き学会報に掲載しますが、文献目録である論著リストの作成は、本年をもって廃止することになりました。この件は本年5月の第1回理事会で決定したことです。いろいろな意見はあると思いますが、将来計画特別委員会や研究推進・国際交流委員会での検討結果もふまえて、決定いたしました。

したがいまして、ホームページに掲載しています論著リストは、現在掲載中の分が最後になります。例年、本「学会便り」の第2号で、著書・論文等のデータを知らせてくださるように呼びかけていますが、それも本年から取り止めとなります。

また、学界展望の講評文を学会報に掲載するだけでなく、ホームページにも掲載することになりました。その公開時期につきましては、学会報の発行の、約1か月後を考えています。

理事会において、学界展望に日本漢学部門を設けたらどうかとの意見がありました。しかし、現実的には、執筆を依頼できる人を見つけるのに難航すると思われるので、時期尚早であろうと判断しました。当分の間は、哲学・文学・語学の3部門の中で言及してもらうことになりました。

○学会便りについて

今、ご覧になっている「学会便り」の編集は、本学会委員会規約によって、出版委員会が担当していますが、今回から執筆者の人選を、研究推進・国際交流委員会に移管しています。多様な顔ぶれになったことと思います。

内容や執筆者の候補について、ご意見、ご希望がありましたら、学会事務局を通して、出版委員会にお知らせください。

選挙管理委員会

委員長　松原　　朗

10月7日に、大会開催中の山形大学において、本年度第1回選挙管理委員会を開催した。そこで来年度実施される評議員選挙、理事長選挙、監事選挙の日程を審議し決定した。その結果、評議員選挙は来年の六月初頭から7月初頭にかけて、理事選挙は同じく7月初頭から8月初頭にかけて、監事選挙は同じく10月の大会開催中の評議員会の時となった。また今年度いっぱいで評議員定年となる3名の評議員の補充について、3名の繰り上げ当選者を確認した。以上の二件は、10月8日の第3回理事会で報告し承認を得た。

❖ 各種委員会報告

研究推進･国際交流委員会

委員長　宇佐美文理

日本漢学の学界展望の作成について、また学界展望のWEB公開ならびに著作権の問題について議論し、意見を理事会に上申した。また学会便り（次年度第１号）の執筆者について、三名を推薦した。なお、当委員会から提案している表象文化部門の設置に関連して、山形大学開催の第69回大会において、松村委員を中心に次世代シンポジウム「表象文化研究の試み」を企画し、三名のパネリストによる発表を行った。

広報委員会

委員長　垣内　景子

広報委員会は、ホームページの管理･更新を主な任務としている。今年度も、通常の更新業務を随時行なった他、様々なお知らせを掲示した。

特に、学術情報の国際化が求められる今日、英語･中国語･韓国語のページの充実に力を注いでいる。

なお、今年度より新たに『研究集録』という項目を増設し、数年来本学会が新たな試みとして進めている「次世代シンポジウム」の成果を公開している。

今後は、外部団体からの各賞や奨学金の情報、中国学関係の採用情報、及び各種講演会･研究会等のお知らせ等をさらに充実させ、中国学に携わる者にとっての情報の集積所となれるよう努めると同時に、より見やすく使いやすいホームページを目指して、様々な工夫を試みるつもりである。

将来計画特別委員会

委員長　神塚　淑子

本年度の将来計画特別委員会は、10月7日の大会中に開催された。「学界展望」の今後のあり方について検討し、(1)「学界展望」の文章をWeb公開する場合、その時期は『日本中国学会報』の論文とは切り離して可能な限り早く公開すべきである。(2)学会活動の海外発信という面で、将来的には「学界展望」の文章を英訳してWeb公開することが望ましい。(3)「学界展望」の分担執筆者（署名入り）に若手研究者を起用することで若手育成につなげることができる。(4)「学界展望」の哲学部門と文学部門の中の日本漢学関係の項目内容をより充実させることによって日本漢学研究の振興をはかるのが現実的であり望ましい、などの意見が出された。

その他、新学習指導要領への対応、本委員会そのものの今後のあり方などについて話し合った。

❖ 2017年度 会員動向／新入会員一覧

○会員動向（2017年11月4日現在）

総会員数1686名、準会員数49機関、賛助会員数15社

○退会会員

・退会申出会員（今年度第1回理事会承認分）　13名

會澤　卓司　内村　嘉秀　川勝　守
許　曼麗　小林　二男　小山　三郎
酒井　淳吉　嶋崎　一郎　日野　俊彦
古川　裕　松岡　榮志　横畑　茂明
渡辺　新一

・退会申出会員（今年度第2回理事会承認分）　20名

池澤　實芳　池田　巧　稲畑耕一郎
井波　陵一　浦野　俊則　川久保広衛
絹川　浩敏　金　世中　近藤　龍哉
近藤　則之　佐藤　章和　佐藤　礼子
下村作次郎　孫　亜秋　中尾友香梨
中嶋　朋恵　花登　正宏　谷中　信一
山崎みどり　李　月珊

・4年間の会費滞納による退会会員　23名

○住所不明会員　7名

上手　裕子　田　婧　成瀬　哲生
宮内　四郎　村瀬　裕也　吉田　俊一
渡辺志津夫

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

○新入会員一覧

10月6日に開催された2017年度評議員会において入会が承認された方々は、以下の通りです。

・通常会員　8名

岩田　碧　東京福祉大学（非）
王　媛　清和大学（非）
王　昊聰　九州大学（院）
韓　淑婷　九州大学（院）
胡　凌燕　九州大学（院）
薛　欣欣　九州大学（院）
竹安　宏匡　香川短期大学
楊　柳　九州大学（院）

なお、以下の方々については5月23日付、6月22日付で開催された持ち回り評議員会において入会が承認され、すでに今年度の会員名簿に掲載されています。

・通常会員　27名

Wood Jeremy　汪　涵　王　侃良
大井　さき　柯　明　金澤　典子
川島　麻衣　干　佳琳　剣持　翔伍
呉　雨彤　黄　詩琦　倉　雅晨
孫　瑾　髙崎　駿士　趙　偵宇
長谷川隆一　早川　泉　早川　太基
古野亜莉沙　三鬼　丈知　三津間弘彦
宮本　紗代　余　祎延　吉田　勉
頼　思妤　李　宝霖　劉　珉

・賛助会員　2社

凱希メディアサービス
論説資料保存会

訃　報

『学会便り』2017年第1号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

（敬称略）

飯田　吉郎	（関東地区）	2015年 1月 6日
古勝　亮	（近畿地区）	2017年 4月15日
上尾　龍介	（九州地区）	2017年 5月 4日
福井　文雅	（関東地区）	2017年 5月 4日
尾上　兼英	（関東地区）	2017年 5月11日
松川　健二	（北海道地区）	2017年 8月19日
向嶋　成美	（関東地区）	2017年10月25日

❖ 日本中国学会2016年度(平成28年度) 収支決算書

2016年4月1日～2017年3月31日

(単位：円)

	科　目	予　算	決　算	摘　要	差　額
収入の部	1. 前年度繰越	￥16,321,200	￥16,321,200		￥0
	2. 会員会費	￥10,000,000	￥9,822,000		￥－178,000
	3. 寄付金	￥800,000	￥1,297,000	第67回大会準備会からの寄付を含む	￥497,000
	4. 預金利息	￥1,500	￥573		￥－927
	5. 著作権料分配金	￥0	￥33,500		￥33,500
	総　計	￥27,122,700	￥27,474,273	(A)収入総計	￥351,573

	科　目	予　算	決　算	摘　要	差　額
支出の部	1. 事務局総務費	￥2,460,000	￥2,142,972	(1)～(7)	￥317,028
	(1)印刷費	￥850,000	￥779,751	「便り」・封筒印刷費を含む	￥70,249
	(2)通信費	￥850,000	￥792,892	「便り」「次世代ジンポ」配送費を含む	￥57,108
	(3)交通費	￥100,000	￥33,840	事務局補佐員交通費等	￥66,160
	(4)消耗品費	￥50,000	￥13,793		￥36,207
	(5)庶務処理費	￥50,000	￥0		￥50,000
	(6)雑費	￥350,000	￥312,696	うち振込手数料￥114,920	￥37,304
	(7)業務委託料	￥210,000	￥210,000	斯文会	￥0
	2. 事務局人件費	￥1,560,000	￥1,533,000	(1)(2)	￥27,000
	(1)幹事手当	￥360,000	￥360,000		￥0
	(2)謝金	￥1,200,000	￥1,173,000	事務局補佐員謝金等	￥27,000
	3. 事務局会議費	￥720,000	￥356,699	(1)(2)	￥363,301
	(1)会議費	￥120,000	￥86,755		￥33,245
	(2)役員旅費	￥600,000	￥269,944	第1回理事会ほか	￥330,056
	4. 事業費	￥5,200,000	￥4,852,159	(1)(2)	￥347,841
	(1)学会報等刊行費	￥4,200,000	￥3,696,180	イ～ニ	￥503,820
	イ. 印刷費	￥2,000,000	￥1,732,752	学会報及び名簿	￥267,248
	ロ. 編集費	￥1,500,000	￥1,500,000		￥0
	ハ. 翻訳謝金	￥300,000	￥175,500	英文要旨作成	￥124,500
	ニ. 発送費	￥400,000	￥287,928	(株)サンセイ業務委託等	￥112,072
	(2)学術大会運営費	￥1,000,000	￥1,155,979		￥－155,979

	科　目	予　算	決　算	摘　要	差　額
支出の部	5. 各種委員会運営費	￥1,330,000	￥902,135	(1)～(7)	￥427,865
	(1)大会委員会	￥65,000	￥59,308		￥5,692
	イ. 通信費	￥5,000	￥600		￥4,400
	ロ. 会議・旅費	￥50,000	￥53,708		￥－3,708
	ハ. 謝金	￥5,000	￥5,000		￥0
	ニ. 消耗品・雑費	￥5,000	￥0		￥5,000
	(2)論文審査委員会	￥780,000	￥490,614		￥289,386
	イ. 通信費	￥100,000	￥128,266		￥－28,266
	ロ. 会議・旅費	￥600,000	￥234,276		￥365,724
	ハ. 謝金	￥60,000	￥80,000		￥－20,000
	ニ. 消耗品・雑費	￥20,000	￥48,072		￥－28,072
	(3)出版委員会	￥225,000	￥138,220		￥86,780
	イ. 通信費	￥5,000	￥360		￥4,640
	ロ. 会議・旅費	￥200,000	￥122,860		￥77,140
	ハ. 謝金	￥5,000	￥5,000		￥0
	ニ. 学会便り編集費	￥10,000	￥10,000		￥0
	ホ. 消耗品・雑費	￥5,000	￥0		￥5,000
	(4)選挙管理委員会	￥120,000	￥97,949	改選年度	￥22,051
	イ. 通信費	￥15,000	￥10,604		￥4,396
	ロ. 会議・旅費	￥60,000	￥55,589		￥4,411
	ハ. 謝金	￥40,000	￥31,000		￥9,000
	ニ. 消耗品・雑費	￥5,000	￥756		￥4,244
	(5)研究推進・国際交流委員会	￥20,000	￥5,000		￥15,000
	イ. 通信費	￥5,000	￥0		￥5,000
	ロ. 会議・旅費	￥5,000	￥0		￥5,000
	ハ. 謝金	￥5,000	￥5,000		￥0
	ニ. 消耗品・雑費	￥5,000	￥0		￥5,000
	(6)広報委員会	￥100,000	￥106,044		￥－6,044
	イ. 通信費	￥15,000	￥4,000		￥11,000
	ロ. 会議・旅費	￥5,000	￥0		￥5,000
	ハ. 謝金	￥5,000	￥35,000		￥－30,000
	ニ. 消耗品・雑費	￥50,000	￥0		￥50,000
	ホ. ホームページ管理費	￥25,000	￥67,044		￥－42,044
	(7)将来計画特別委員会	￥20,000	￥5,000		￥15,000
	イ. 通信費	￥5,000	￥0		￥5,000
	ロ. 会議・旅費	￥5,000	￥0		￥5,000
	ハ. 謝金	￥5,000	￥5,000		￥0
	ニ. 消耗品・雑費	￥5,000	￥0		￥5,000
	1～5	￥11,270,000	￥9,786,965		￥1,483,035
	予備費	￥15,852,700	￥0	支出費目としては計上しない	
	合　計	￥27,122,700	￥9,786,965	(B)支出合計	￥9,786,965
	次年度繰越金	－	￥17,687,308	(A)収入総計－(B)支出合計	
	総　計	￥27,122,700	￥27,474,273		￥－351,573

学 会 基 金

	基　本　金	￥4,300,000
収入の部	前年度繰越金	￥956,410
	特別会計積立金拠出	￥0
	預金利息	￥309
	信託収益金	￥175
	合　計	￥956,894
支出の部	日本中国学会賞	￥160,000
	次年度繰越金	￥796,894
	合　計	￥956,894

備考(基本金内訳)		
	奥野基金	￥500,000
	佐藤基金	￥200,000
	池田基金	￥300,000
	伊藤基金	￥300,000
	積立基金	￥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

2017年4月18日

日本中国学会監事　坂角悦子　大西克也　和田英信

❖ 日本中国学会2017年度(平成29年度) 予算書

2017年4月1日～2018年3月31日

(単位：円)

	科　目	予　算	摘　要
収入の部	1. 前年度繰越	¥17,687,308	
	2. 会員会費	¥10,000,000	
	3. 寄付金	¥800,000	
	4. 預金利息	¥1,500	
	5. 著作権料分配金	¥0	
	合　計	¥28,488,808	

	科　目	予　算	摘　要
支出の部	**1. 事務局総務費**	**¥2,060,000**	(1)～(7)
	(1)印刷費	¥650,000	「便り」・封筒等を含む
	(2)通信費	¥650,000	「便り」発送費を含む
	(3)交通費	¥100,000	
	(4)消耗品費	¥50,000	
	(5)庶務処理費	¥50,000	
	(6)雑費	¥350,000	振込手数料および対外費を含む
	(7)業務委託料	¥210,000	斯文会
	2. 事務局人件費	**¥1,560,000**	(1)(2)
	(1)幹事手当	¥360,000	
	(2)謝金	¥1,200,000	事務局補佐員謝金を含む
	3. 事務局会議費	**¥420,000**	(1)(2)
	(1)会議費	¥120,000	
	(2)役員旅費	¥300,000	第1回理事会ほか
	4. 事業費	**¥5,200,000**	(1)(2)
	(1)学会報等刊行費	¥4,200,000	イ～ニ
	イ. 印刷費	¥2,000,000	学会報及び名簿
	ロ. 編集費	¥1,500,000	
	ハ. 翻訳謝金	¥300,000	英文要旨作成
	ニ. 発送費	¥400,000	(株)サンセイ業務委託等
	(2)学術大会運営費	¥1,000,000	
	5. 各種委員会運営費	**¥1,230,000**	(1)～(7)
	(1)大会委員会	**¥65,000**	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	**¥780,000**	
	イ. 通信費	¥100,000	
	ロ. 会議・旅費	¥600,000	
	ハ. 謝金	¥60,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	**¥225,000**	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥200,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 学会便り編集費	¥10,000	
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(4)選挙管理委員会	**¥20,000**	非改選年度
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(5)研究推進・国際交流委員会	**¥20,000**	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(6)広報委員会	**¥100,000**	
	イ. 通信費	¥15,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	
	ホ. ホームページ管理費	¥25,000	
	(7)将来計画特別委員会	**¥20,000**	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	1～5	**¥10,470,000**	
	予備費	¥18,018,808	
	合　計	**¥28,488,808**	

学 会 基 金

	基　本　金	¥4,300,000
収入の部	前年度繰越金	¥796,894
	預金利息	¥1,000
	信託収益金	¥500
	合　計	¥798,394
支出の部	日本中国学会賞	¥80,000
	次年度繰越金	¥718,394
	合　計	¥798,394

備考(基本金内訳)	奥野基金	¥500,000
	佐藤基金	¥200,000
	池田基金	¥300,000
	伊藤基金	¥300,000
	積立基金	¥3,000,000

❖ 事務局からのお知らせ

彙報

2017年度第1回理事会（5月21日開催）での決定事項について、5月23日付で持ち回り評議員会を開催した。報告事項は以下の通り。

【報告事項】
- 2017年度日本中国学会賞受賞者の決定について
  ［哲学・思想部門］
  青山　大介　会員
  「安井息軒『書説摘要』考―その考証学の特質―」
- 新入会者の決定について

6月1日付で持ち回り評議員会を開催した。審議事項は以下の通り。

【審議事項】
- 会則改正について
- 論文執筆要領の改訂について

持ち回り理事会（6月17日付）にて決定した新入会者について、6月22日付で持ち回り評議員会を開催し、報告した。

10月6日に開催した2017年度評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】
- 理事長報告
- 会則の改正について
- 各種委員会報告
- 『日本中国学会報』第69集及び会員名簿の発行について
- 学会報編集担当校・大会開催校等について（2018年度）

学会報編集担当校	首都大学東京
学界展望執筆担当校	哲学／東北大学
	文学／京都大学
	語学／日本中国語学会
学会便り編集担当校	九州大学
大会開催校	東京大学

- 会員動向について
- その他

【審議事項】
- 2016年度決算・監査報告
- 2017年度予算案
- 新入会員の承認
- 第70回記念大会について
- 論文リスト作成の廃止について
- 2017年度総会次第について
- その他

翌10月7日の2017年度総会において、評議員会での議決事項を報告した。

持ち回り評議員会（11月17日付）での承認を得て、次の二会員を、先例にならい資格が生じた（ ）内の年度に遡って、顧問に委嘱することとなった。

三浦　國雄　会員（2012年度）
吉田　公平　会員（2013年度）

◎会則の改正について

2017年度第1回理事会（5月21日開催）、持ち回り評議員会（6月1日付）の議を経て、以下の通り会則が改正されました。監事選挙の有権者から副理事長を除く慣例を明文化したもので、「移行措置」については、この記載が既に役割を終えたことによるものです。

第11条（役員の選出・委嘱）
［改正前］
4. 監事は理事長および理事を除く評議員の互選による。

［現　行］

4. 監事は理事長と副理事長と理事の三者を除く評議員の互選による。

評議員会・理事会・監事会規約

［改正前］

3（2）監事は、理事を除く評議員の互選により、最高得票数を得た者を主席監事とする。

［現　行］

3（2）監事は理事長と副理事長と理事の三者を除く評議員の互選により、最高得票数を得た者を主席監事とする。

移行措置

［改正前］

1　平成18年4月1日より新会則を完全実施するまでは、現会則による事務局が事務を担当する。

［現　行］

「移行措置」以下、全て削除。

「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行予定の「学会便り」に掲載することになっています。

2017年1月から12月までに開催された国内学会の原稿は、来年（2018年）2月末までに、下記あてに電子メールでお送りください。お送りいただく電子テキストをそのまま印刷します。校正はありませんので、あらかじめご承知おきください。

Nihonchugoku.tayori@gmail.com
（「学会便り」2018年第1号編集用アドレス）

◎会費の納付について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2ヶ年（2016・2017年度）未納の方には、今年度の学会報を送付しておりません。また、4年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

◎住所・所属機関等の変更について

住所や所属機関等に変更がありましたら、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。電子メール、郵便、あるいはファックスをご利用ください。

◎クレジットカードによる会費決済について

今年度より、海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を開始しています。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページのURLをお送りいたします。なお、利用可能ブランドはVISA・MASTERのみです。ご了承ください。

日本中国学会事務局
電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org
郵　便：〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内
ファックス：03-3251-4853
ゆうちょ銀行振替口座
口座番号：00160-9-89927
加入者名：日本中国学会

❖「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等を合わせて、以下のように定める。ワープロ使用の場合、用紙サイズはA4、1行30字、毎ページ40行、文字は本文、注ともに10.5ポイントを用い、18ページ以内（厳守）とする。この書式に合わないものは、受理しないこともあるので、注意すること。採用論文の印刷の段階で、規定のページ数を超過した場合には、調整を求めることがある。なお、手書きの場合は400字詰原稿用紙54枚以内（厳守）とし、論文が採用された場合、電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、『學會報』の組版における占有面積により文字数を換算する。『學會報』半ページ分が、ほぼ25行（1行30字）である。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。但し、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所に明記する。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。注の表記については、本学会が定めたガイドラインに沿うことが望ましい。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語・拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例：孫逸仙Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には2000字以内の和文の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、1200字程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月15日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内　日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想、文学・語学、日本漢学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校　　正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜　　刷

18. 論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

そ　の　他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）
（平成13年5月13日修正）
（平成14年10月13日一部修正）
（平成15年10月5日一部修正）
（平成19年10月7日一部修正）
（平成20年5月17日一部修正）
（平成21年10月11日一部修正）
（平成22年6月6日一部修正）
（平成22年10月10日一部修正）
（平成23年10月9日一部修正）
（平成24年10月7日一部修正）
（平成25年3月31日一部修正）
（平成25年10月13日一部修正）
（平成27年10月10日一部修正）
（平成29年6月12日一部修正）